

岩波講座 日本語

12

日本語の系統と歴史

岩波書店

〈執筆者紹介〉

- 風間喜代三（かざま きよぞう） 1928年生 東京大学文学部助教授
池上二良（いけがみ じろう） 1920年生 北海道大学文学部教授
崎山理（さきやま おさむ） 1937年生 大阪外国語大学外国語学部助教授
大江孝男（おおえ たかお） 1933年生 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
田村すゞ子（たむら すずこ） 1934年生 早稲田大学語学教育研究所助教授
西田龍雄（にしだ たつお） 1928年生 京都大学文学部教授
佐佐木隆（ささき たかし） 1950年生 学習院大学大学院人文学研究科博士課程
阪倉篤義（さかくら あつよし） 1917年生 京都大学教養部教授
鏡味明克（かがみ あきかつ） 1936年生 岡山大学教育学部助教授

岩波講座 日本語 12 日本語の系統と歴史

第12回配本（全12巻 別巻1） ￥2000

1978年1月9日 第1刷発行 ©岩波書店 1978

発行所：〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 株式会社 岩波書店 電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・牧製本

まえがき

日本語の親戚はどこに求めることができるか、日本語は歴史的にどのように発展して来たかという問いは、日本が明治時代にヨーロッパの言語学を輸入して以来の宿題であるといえよう。

日本語の親戚は、はじめアルタイ語、また朝鮮語に求められるとヨーロッパ人によって唱えられて、案外簡単に片付くかのように見えた。しかし学問が進み、吟味がこまかくなってくると、堅実な証明は意外に困難であることが判明した。そして今日に至るまで確かな結論に到達できないでいる。しかし日本語の系統を確定したいという知的欲求が絶えることはなく、その欲求は学者たちを駆り立て、種々さまざまな論議をかわさせている。

その研究の困難の第一は、言語の系統の証明に要する学問的手続が、言語学特有の仕組みを持ち、決して簡単でないことにある。いわゆる比較言語学について、素人には近づきがたい点があるのはやむを得ないが、本巻はそれを正しく理解しうるようにしたいと願って編集した。

日本語の系統の研究の困難の第二は、研究者が日本語についてだけでなく、比較すべき相手の言語にも精通していることが当然要求されることである。一言語に通じることすら困難なのに、他の言語の時代的な変化の隅々までを知ることが、極めて困難なのである。本書ではその困難な課題について、従来日本語と比較され、かつ重要とされて来た諸言語を取りあげ、それぞれ得難い専門家を配して、具体的に、学問の今日の状況を語ってもらったつもりである。

一方、日本語の歴史的な発展については、すでに「言語生活」「音韻」「文法」「文字」「文体」等の諸巻において、それぞれの分野に関してかなり詳細な記述を試みている。それゆえ本巻ではそれを再びせず、これまで取り扱わな

った語源の研究、地名の研究等についての論考を収めて、関心の深い読者に役立てようとした。

「言語の系統と形成」では比較言語学の基本的諸問題について明らかにし、「アルタイ語系統論」では最も古くから提唱されているアルタイ語と日本語との関係を論じるに先立ち、アルタイ語族なる概念について考察を加えている。以下、「南方諸語との系統的関係」「朝鮮語と日本語」「アイヌ語と日本語」「チベット・ビルマ語と日本語」においては、日本の近隣の諸言語それぞれの言語の特質を記述し、日本語との関係を論じる場合の基本的知識とし、多くの論考を批判する資料たらしめようとした。各言語の第一線の専門家の、詳しい今日的な議論を、これほどに集め得たことを喜んでゐる。また「日本語の系統論史」は明治以降の学説の歩みを概観し、今後の進展に役立てようとするものである。

なお、「日本語の語源」「地名の起源」は、日本語の内部の溯行を試みようとする場合に直面する、語源の問題についてその正しい研究方法を探索するための論考といえよう。

一九七七年 一二月

編集委員

岩波講座 日本語 12

目次

1 言語の系統と形成……………風間喜代三……………一

- 一言語の分類——類型論と系統論……………三
- 二 比較文法における対応の扱い……………二
- 三 比較文法における資料上の限界と印欧語の特性……………五
- 四 比較対応と語彙の借用の問題……………九
- 五 比較に有効なもの……………三

2 アルタイ語系統論……………池上二良……………三

- 一 現代および歴史上のアルタイ語……………七
- 二 アルタイ語の構造……………四
- 三 アルタイ語の系統論……………五
- 四 アルタイ語の音韻対応……………五
- 五 アルタイ語の形態素の比較……………六
- 六 アルタイ語比較研究の問題点……………七
- 七 アルタイ語比較研究上の諸問題……………七
- 八 アルタイ語、とくにツングース語と日本語との比較……………八

3 南方諸語との系統的関係……………崎山理……………九

- 一 フンボルトのマライ・ポリネシア語研究……………一〇

二	南島語族の古里	一〇七
三	デムブウォルフの南島語研究	一一〇
四	ダイエンの南島語研究	一二五
五	南島語の接辞法	一二九
六	南島語の統辞法	一二七
七	南アジア語	一三〇
八	非南島語(バプア語)	一三三
九	日本語と南島語との関係	一三五
一〇	最近の系統論	一四〇
4	朝鮮語と日本語	大江孝男
一	朝鮮語との比較研究史概観	一五三
二	比較研究の現状	一六二
5	アイヌ語と日本語	田村すゞ子
一	アイヌ語概観	一六七
二	日本語との関係	二二五
6	チベット・ビルマ語と日本語	西田龍雄
一	日本語系統論	三三〇

二	チベット・ビルマ諸語の分布	三三
三	藏緬語の語幹構成法	二四四
四	動詞の比較	二六三
五	形容詞の比較	二七八
六	基礎的語彙の比較	二八〇
七	今後の課題	二八九
7	日本語の系統論史	三〇一
一	導言	三〇三
二	日本語系統論の現状とその環境	三〇四
三	日本語系統論のあゆみ	三〇七
四	結語	三一九
8	日本語の語源	三二七
一	「語源」は一つではない	三二九
二	語史研究と文化史的語源	三三六
三	日本語の語源研究、その意義	三六三
四	日本語の語根をめぐって	三七〇
9	地名の起源	三八一
	鏡味明克	三八一
	阪倉篤義	三二七
	佐佐木隆	三〇一

一	地名と古語	三六三
二	地名と漢字	三八九
三	地名の時代型と地域型	三九一
四	アイヌ語地名と日本語地名	三九六
五	これからの地名研究	四〇四

1

言語の系統と形成

風
間
喜
代
三

一 言語の分類 — 類型論と系統論 —

二 比較文法における対応の扱い

三 比較文法における資料上の限界と印欧語の特性

四 比較対応と語彙の借用の問題

五 比較に有効なもの

むすび

一 言語の分類 — 類型論と系統論 —

世界にはいくつぐらい言語があり、またそれらが互いにどのような関係にあるかということとは、言語に関心のあるすべての人にとって大いに興味ある問題である。したがって言語を分類するということは、言語学にとっても重要な課題の一つとなっている。そのために、従来二つの方法が認められてきた。一つは類型論的な分類であり、もう一つは系統論的な分類である。いうまでもなくこの二つの方法の研究は、近代の言語学の発足とともに始められたといつてよいだろう。その後今日に至るまで、さまざまな説が提唱され、また検討されてきた。

一九世紀の初めには、どのくらいの数の言語が世界に知られていたのだろうか。一八〇六年にアーデルング(J. Chr. Adelung)というザクセンの王室につとめる学者が、『ミトリダーテース(Mithridates)』という古代の有名なポリグロットの王の名を表題にした書物をベルリンで公けにした。彼はその直後に死んだので、その後をファーター(J. S. Vater)という人が引き継いで、一八一七年にこれを完成した。その記述は、今日からみれば非常に不正確なものであるが、いわば『世界の諸言語』の初版のようなものである。その第一巻アジア篇は、一音節語と多音節語の二部に大別され、日本語は後者にふくまれている。当時比較文法の上でようやく注目を浴びるようになったサンスクリットも同じ部に入れられ、かなりくわしく述べられている。以下ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、そして補遺篇と続き、全四巻、二〇〇〇頁をこえるこの書物には、その副題が示す通り、「主への祈り」(パテル・ノステル)を言語見本として約五〇〇の言語が収められている。

そしてその分類の方法は地域別である。単なる地域別の分類は、隣接する諸言語を順次並べて論じるだけで、それ

ら相互の關係については、説明があたえられない。ところがどんなに地理的にはなれていても、ある規準によって二つの言語が關係づけられることがある。インドのサンスクリットとアイルランドのアイルランド語の關係はその一例である。アイヌ語は印欧語だという主張は、われわれにとつてはなにか心情的にも受け入れ難いものがあるけれども、戦後もヨーロッパの一部の學者によってまともにとりあげられた課題であった。またこれとは逆に、どんなに隣接していても系統的には互いに無關係という例もある。イベリア半島のスペイン語とバスク語の關係はその一例である。どんな言語にもこうした結びつきが可能であるところに、分類の興味がある。その点で單なる地域別の説明は、學問的にもあまり用いられない。とくに今日のように約三〇〇〇と推定される言語数を考えると、『ミトリダーテース』の比ではないから、一定の規準による分類に一層の關心がよせられるのも當然であり、またそれが必要である。しかしその方法は、どうしても上述の二つの方法に依らざるをえない。これらにまさる新しい分類の規準が、今までのところみ当らないからである。

類型論的な方法は、一九世紀の初めにシュレーゲル(F. von Schlegel)によって最初に試みられたといわれている。それは各言語のもつ形態論的な主たる特徴を基礎にしている。まず中国語をみると、それを構成している要素は單音節からなっていて、他の言語にみられるような名詞とか動詞という品詞の区別がない。これを孤立語とよんでいる。つぎにはトルコ語に代表される膠着語がある。日本語もその一例とされている。トルコ語では、例えば動詞の人称変化にしても、語幹部と人称接辞の膠着が非常にはっきりしている。これにたいしてギリシア語やラテン語のような古い印欧語の場合には、語幹部と接辞・語尾とが融合し、語の文法的關係は助詞などによらずに、一語の中にふくまれる語尾変化によってあらわされる。これを屈折語という。さらには抱合語とよばれるグループがある。エスキモーの言語がその典型とされている。この型の言語では、語が独立して用いられるときと、他の語と複合して用いられるときとは、常に形を異にする。そして一つの文は一語のような形をとる。孤立語・膠着語は、文法的な關係を、切り

はなされた形に担わせる分析的な傾向が強いのにたいして、屈折語・抱合語では逆に一語の中に文法的関係をたたみこもうとする総合的な傾向が目立っている。これら四つのタイプのほかに、アフリカのバントゥー語のような言語を範疇語とよんで区別することがある。この言語では、日本語で人間を「ひとり」、本を「一冊」、紙を「一枚」と数えるのに似て、人間・人間以外の生物・無生物など、すべてのものを二〇近い範疇にわけて、それを接頭辞で明示する習慣があるので、この名がある。

さてこれら四、ないし五の型で世界の言語を分類しようとする試みが、いく度くり返されてきた。しかし言語の研究が進み、新しい言語が数多く知られてくるにつれ、これだけではあまりに大枠にすぎる嫌いがあり、より細かな分類の規準が求められるようになった。『言語』の中の一章をさいた有名なサピア(Sapir)の分類も、そうした苦心のあらわれである。ところがそうになると、一方では規準が複雑になって、明確さが損なわれる。また規準に客観性が失われる恐れがでてくる。多種多様なものを分類しようとするのだから、われわれは初めから複雑でない、簡明なものを目指している。規準の数をふやし、またそれらを組み合わせると、どうしてもこの理想から遠ざかる憾みがある。本来言語はいくつかの大きな枠で割り切れるほど単純なものではない。例えば、よくいわれるように、英語は不規則動詞をみると、現在・過去・過去分詞を母音交替によって区別しているから、屈折語の特徴を示している。しかし、ドイツ語にくらべるとすぐわかるように名詞・形容詞の格変化はまったくなく、その形は孤立語的傾向を示している。日本語は膠着語とされているが、動詞の活用形などは一種の屈折形態とみられないこともない。印欧語やセム語は屈折語であり、アルタイ語は膠着語であるといわれるが、これもごく概括的な説明である。

いろいろの面をもつ言語のどこをおさえて分類していくかについて、最近では音韻組織・統語論的特徴もその規準にとりあげられているが、旧来の形態論的分類にまさるものではない。この方法はたしかに多くの言語を分類する一応の目安を立てることに成功した。また資料的に系統を明らかにしえない言語について、まずこうした類型論的な

構造上の類似を求めてグループ分けをすることは有効である。ただその場合、設定される規準によって分類に動揺がみられることもやむをえない。系統の不明な多くのアフリカの言語の分類が、その一例である。この方法の完成は、今後の研究にゆだねられているといつてよいだろう。

それでは一方の系統論的な分類はどうであらうか。この方法は、いうまでもなく初め印欧語系の言語の場で修得され、それから他の領域に適用され、より確実なものとなされてきた。これは、上述の類型論的な方法とは規準を異にする。したがってその結果も一致しない。類型論的な方法は、ふつうある時点でのある言語の組織を問題にするのだから、一つの言語でも、英語のように古代と近代では形態論的にみてかなり違っている場合もあり、その各々について別個の考慮が必要となってくる。これにたいして系統論的な方法は、発生的にある言語がどういう系統の語族に属するかを究明しようとする。つまり、一方は共時的な意識に基づいているのに、他方は通時的にさかのぼることのできる終着点の時期にどうであつたかを問題にしている。だから、ある時期でとらえたある言語の形態論上の特徴を束ねてみても、これは系統論とは本来関係がないといわざるをえない。

ここでブラーグ学派の創設者の一人であるトルベツコイ(N. S. Trubetzkoy)の試みについてふれておこう。彼は一九三六年二月一四日、ブラーグの言語学者サークルで講演し、印欧語をいくつかの類型論的な規準で規定しようとした。これは少しおくれれて一九三九年にコペンハーゲンの言語学雑誌「Acta Linguistica」の創刊号の八一―九頁にわたって、「印欧語族問題についての考察」(Gedanken über das Indogermanenproblem)と題して発表された。もちろん彼は、伝統的な系統論における語族設定の方法を無意味なものとみて、こうした提案を行ったわけではない。ただ後で述べるような印欧語の比較文法にふくまれる疑問から、ある言語が印欧語族に属するか否かをきめるのに、音や形態上の一致にあまり大きな意味をあたえる必要はない、と彼は考えた。純粹に理論的にいって、「ある言語の印欧語の性格を保証するために、こうした一致がいくつなければならぬか、をあたえることはできない」。そこである

言語が印欧語であるという証明のために「こうした素材の一致の存在以外に」、なおつぎの六つの構造上の目安を有効なものとして、彼は提案したのである。それを簡単に要約すると、つぎのようなものである。

- (一) 母音調和がない。母音調和とは、第一音節の母音の性質に、後続音節の母音の性質が規定されることである。
- (二) 語頭の子音組織が語中・語末のそれにくらべて貧弱でない。この特徴は、ウラル語、アルタイ語、ドラヴィダ語との比較によって証明される。

- (三) 語は必ず語根で始まらなければならないという必要はない。接頭辞のない印欧語はない。最古の印欧語でも、真の接頭辞、つまり独立の語としては用いられない形態素があらわれている。比較的新しい印欧語では、こうした接頭辞の数は急激にふえている。

- (四) 形の形成は接頭辞のみならず、語幹形態素内部の母音交替によっても行われる。母音交替の痕跡のない印欧語はない。

- (五) 母音交替のほか、自由な子音交替も形態論的な役割を演じている。この特徴は、例えばセム語、アルタイ語など他の言語タイプとの比較によって明らかである。

- (六) 他動詞の主語は自動詞の主語と同じ扱いをうける。主格と対格という格の対立が語尾によってあらわされる印欧語では、動詞が他・自動詞のいずれでも、その主語は主格に立つ。また文中の関係が語順であらわされる印欧語では、他動詞の主語は自動詞のそれと同じ位置をとる。

これらの特徴のいくつかは、非印欧語にもあらわれる。例えば、コーカサスの言語とかセム語は、(一)(二)(三)(四)の点で印欧語と共通している。(五)(六)はウラル語、アルタイ語と通じるものがある。しかし、これら六つの特徴をすべて揃えているのは、印欧語しかない。どれほど語彙に印欧語以外の要素が借用されようとも、この六つの特徴をもっていれば、それは印欧語である。この特徴を揃えれば、どの言語も印欧語となる。従来の比較文法が指摘するような語彙や